

永遠の旅人 松浦武四郎

1. はじめに

今からおおよそ 150 年前、明治 2 年 (1869) 5 月、榎本武揚えのもとたけあきら旧幕府軍ごりようかくが五稜郭で降伏し戊辰戦争ぼしんせんそうが終結した。7 月に開拓使を設置し、ようやく蝦夷地開拓が始まったのであった。開拓を進めるにあたり、蝦夷えぞに代わる新たな名称が求められた時、伊勢松阪に生まれたひとりの探検家が新名称を提案したのである。彼の名は松浦武四郎、この年開拓判官はんがんに任じられた蝦夷を知り尽くしたエキスパートであった。彼は「日高見道」、「北加伊道」、「海北道」、「海東道」、「東北道」、「千島道」の 6 案を提出した。この中の「北加伊道」とは北に暮らすアイヌ人の大地という意味で、字を「北海道」と改めたうえでこれが採用された。この結果、彼は「北海道の名付け親」と呼ばれるようになったのである。

今回は歴史的あまり着目されることの少ない彼に焦点を充てて、飽くことのない旅に明け暮れた動機とは何だったのか、蝦夷やアイヌにとことん執着したのは何故なのか、そして武四郎は幕末維新の日本にどのような影響を与えたのか。おそらくはロシア船が度々北方地域に出没していたため、日本の安全保障に警鐘を鳴らすとともに、そこに暮らすアイヌを守ってゆくことがその使命と考えたのであろう。今一度、彼の生涯を辿ることにより、従来の北海道の名付け親という姿に左右されることなく真実の姿に迫ってみたいと思う。

2. その生い立ちとおかげ参り

松浦武四郎は文化 15 年 (1818) 2 月 6 日、伊勢国一志郡須川村すがわ (現在の三重県松阪市小野江町) に、父桂介けいすけ (時春)、母登宇ときはるのもとに 4 男として生まれた。須川村は紀州和歌山藩の領地で松浦家は村をまとめる地土じしを務め、住まいは伊勢街道に面していた。寅年生まれなので虎とゆかりがある竹、そして 4 男ゆえに四郎を組み合わせて「竹四郎」と名付けられた。武四郎と名乗ったのは後のことである。7 歳になると近所にある真覚寺しんかくじの来応和尚から読み書きを習うことになる。このころから、「名所図会」を愛読するようになったという。武四郎 13 歳のころ、「文政のおかげ参り」が起り、全国各地から伊勢神宮へ多くの参拝者が訪れていた。

ここで少し逸れるが「おかげ参り」について見て行こう。これは江戸時代に 60 年周期で起こった集団参詣活動であった。この当時、庶民の移動は厳しく制限されており、自由にできない中で、伊勢神宮参拝については通行手形を比較的容易に発行してもらえたという。農業技術や商品経済の発達により、農民が旅行記のようなものを手に入れる

ことも可能になったのである。それでも旅費は相当の負担であった。そこで登場したのが「お伊勢講」と「御師」であった。お伊勢講とはその所属者はお金を出し合い、くじ引きで選ばれた代表が伊勢へと向かうのである。全員がいつかは当たる仕組みになっていた。また、この勧誘活動を進めたのが御師たちであった。彼らはツアーコンダクターであるとともに、旅行者の伊勢滞在中は彼らの世話をした。自分の宿に泊めて歓待したのだった。文政のおかげ参りでは400万人の参詣者があったというが、当時の日本の人口が3200万人程度だったことからすると、その規模が想像できるであろう。この結果、最新の情報が各地にもたらされることになり、土産などの風習もそのころに始まったとされる。伊勢街道に面した松浦家の前を大勢の旅人が行きかう光景は、幼い武四郎にとって旅への憧れと見知らぬ土地への探求心を掻き立てることになったであろうことは想像されよう。

この年から3年間、武四郎は津藩の儒学者平松樂齋のもとで学ぶことになる。樂齋は天保の大飢饉に対しての対策を藩に進言したりした人で、全国の学者たちが彼を訪ねてきたのであった。ここで生涯の親友、川喜田崎之助（14代久太夫：石水）に出会っている。武四郎は儒学を学ぶ中で次第に骨董品などの古いものに興味を持つようになった。16歳になったころ彼はついに家出を実行する。中嶋周助という親戚の少年宛ての手紙が残っているのだが、津から飛脚を使っており、飛脚賃は「ちんさき払」（受取人払い）とあり急いで家を出て行ったものと思われる。手紙でいろいろと物の整理を依頼しているが、その最後には「この先私は江戸、京、大坂、長崎、唐または天竺へ行くかもしれない。2～3年の内には家に戻るのでもよろしく願います」とあり、海外にまでその視野は広がりつつあった。江戸では山口という篆刻家のもとで居候をしながら篆刻の技術を身に着けたのであったが、それがその後の彼を大いに助けることになるとは知る由もなかった。津藩の江戸屋敷に務めていた親戚から実家に連絡が入り、結局連れ戻されることになったが、それでも中山道を通り善光寺、戸隠山などに登ってから帰ったのである。

3. 武四郎の諸国遍歴

実家に戻った武四郎は今後の自らの将来を考えたことだろう。ますます旅への憧れが強くなったのではなかろうか。そして、天保5年（1834）9月9日、17歳になった武四郎は再び旅に出たのである。家出した前回の江戸行きとは違って、家族に告げての旅だったが、実に9年に及ぶ諸国遍歴となった。まずは京、大坂へ向かい、平松樂齋の縁で学者、画家、漢詩人などを訪ねている。その後、播磨、備前を経て瀬戸内海を渡り讃岐、阿波、淡路、紀伊へと歩を進めてそこで年を越した。翌年、那智、熊野、高野山から河内、和泉、摂津、山城、丹波、但馬、若狭と巡り、北陸から信濃、甲斐、江戸へと向かった。さらに北へと進み日光、白河、仙台、松島まで行ったようである。こののち太平洋岸を南下して、水戸、銚子、房総を訪ねて江戸へ戻った。江戸を出ると東海道を

西へ進み、三河の伊良湖岬から鳥羽へ渡り、紀伊半島を海岸沿いに南下した。その後、紀伊山地を吉野へと北上している。さらに四国の阿波へ渡り、讃岐の八栗山麓で年の暮れを迎えたのであった。

天保7年(1836)、武四郎は19歳になり四国八十八ヶ所の霊場を巡る旅路に就いた。

1番札所の阿波霊山寺から始めて、3月には土佐、4月には伊予へと進み、5月には石槌山に登り金比羅、祖谷を訪れた後に6月には剣山に登頂を果たした。そして船で紀伊水道を渡り吉野周辺の南朝の史跡を巡ると室生、赤目、名張、笠置を経て京へと入った。京から今度は摂津、播磨、美作、但馬、因幡、伯耆と山陰へと向かい、大山に登ると出雲大社、萩まで来ると反転して備中から瀬戸内沿岸を西へ進み尾道、三原を経て府中で年の瀬を迎えたのであった。

天保8年(1837)、20歳になった武四郎は宮島参拝のあと周防、長門を経て下関から九州へ渡った。小倉、博多、大宰府、唐津、彼杵まで来ると長崎は旅人への身元の取り調べが厳しいと聞き、諫早から佐賀、久留米、熊本を経て阿蘇山にも登っている。その後、耶馬溪、宇佐、さらに豊後の別府へ向かい竹田を経て日向へ入った。その間の9月には盗賊に出くわして金品を奪われるという危険な目にも遭っているのである。延岡、佐土原、飫肥(おび)、都城を経て薩摩に入ったが、ここも警戒が厳しく滞在は3日に限られた様である。その年は肥後の志貴村で年を越している。

天保9年(1838)、長崎で大病を患った武四郎は快癒すると、臨済宗禅林寺の講堂和尚のすすめで出家して「文桂」という僧名を頂いて、平戸の宝曲寺、千光寺などで住職を務めたのである。翌年には五島列島を訪れている。平戸では武四郎は3年の間、寺で住職を務めた。それでも、壱岐、対馬へ渡りたいという願いを持ち続けた彼は、天保13年(1842)9月対馬に向かうイカ釣り漁船に乗せてもらい平戸を後にした。さらに朝鮮半島を目指したものの、鎖国体制下にあつて許されるはずもなく半月後には平戸へ戻ることを余儀なくされたのである。翌年、長崎に滞在している時に蝦夷地がロシアによって脅かされていることを始めて知ったのであった。武四郎の目は一転して北の大地に注がれることになる。1年前に母が亡くなったことを手紙で聞いており、まずは帰省して両親の墓に参ると、蝦夷地調査の準備を始めたのである。

4. 明治以前の蝦夷地の歴史

古代史には「蝦夷(えみし)」という言葉が出現するが、現在ではこれはアイヌなど特定の民族や集団をさすのではなく、東北以北の朝廷に従わない人々を示すものと考えられている。それが平安時代の後期、12世紀ごろになると「蝦夷(えぞ)」と呼ぶようになってゆく。言葉の意味合いも民族的概念へと変化していき、鎌倉幕府が成立すると、「蝦夷(えぞ)」はアイヌを中心とした異民族を表す言葉となったのである。北条氏は津軽半島の十三湊の豪族安藤(安東)氏を蝦夷管領として、流人の移送や監視を担わせたのだった。渡島半島には和人たちの港町が形成されてゆき、アイヌ人たちと、ラッコ

の毛皮や鷲・鷹の羽根、昆布などの交易が盛んになってゆくのである。

1457年、アイヌの少年が和人に刺殺されたことを契機にアイヌ人が蜂起した（コシャマインの戦い）。この背景には和人とアイヌの対立があったと思われる。コシャマインは安藤氏の道南十二館（たて）を次々に攻め落とし、ついに二館を残すばかりとなった。そのひとつ花沢館の館主^{かきざき}蛎崎氏の武将武田信弘の活躍でこれに勝利し、彼はその後蛎崎氏を継いだのである。蛎崎氏はのち松前を本拠地にして、道南地方に勢力を拡大していった。

1590（天正18）年、豊臣秀吉の奥州仕置きに際して^{かきざきとしひろ}蛎崎慶広は上洛し、秀吉に拝謁した。これでようやく蛎崎氏は安藤氏の支配下を脱して、独立した大名として認められたのである。1598（慶長3）年、秀吉が亡くなると、翌年大坂城西の丸で家康に拝謁した。このとき慶広に「松前」の姓が与えられたが、これは道南の地の支配権を認められたことを意味する。こののち^{こくいんじょう}黒印状を下賜されて、蝦夷地全土の交易権が公認されたのであった。松前藩は石高のない交易の課税で藩財政を賄う唯一の藩であり、のちに1万石の大名扱いとなった。家臣たちには一定の地域（商場：あきないば）でアイヌ人たちと交易する権利を与えることになっていった（^{あきないばちぎょうせい}商場知行制）。これはアイヌ人たちの自由な活動を禁止するもので、物資の交換条件を巡って次第に不満が高まっていった。1669（寛文9）年、アイヌの首長シャクシャインが蜂起し松前藩との間に戦いが始まった。松前藩は彼を和睦の酒宴の席で謀殺して、この戦いを終わらせたのである。

18世紀になると商品経済が発展して海産物への需要が大きくなると、家臣たちは商場の経営を商人に任せるようになった。「商場知行制」は「場所請負制」へと移行して行くのである。内地での藍や綿花栽培の増加で肥料としてのニシンの需要増や長崎貿易での海産物の輸出増が背景にあったのである。商人たちは低賃金でアイヌ人を酷使したので1789（寛政元）年、一斉に蜂起した。これが最後の武力衝突となる「クナシリ・メナシの戦い」である。この戦いの後、蝦夷地は幕府の直轄地となった。

この頃からロシア船がたびたび出没していた。幕府は寛政11年に東蝦夷地を直轄化し、文化4年には松前をふくむ西蝦夷地も直轄とした。松前藩には替地として^{むつ}陸奥国^{だて}伊達郡^{やながわ}梁川（福島市）に9千石を与えて転封としたのである。しかし、幕府による経営はうまくいかず、松前藩サイドの復領運動もあり1821（文政4）年、元に戻されたのであった。その後、外圧が高まると幕府は1854（安政元）年、またも蝦夷地を直轄領とした。箱館奉行を置いて、松前藩は松前、江差周辺に留めおき、蝦夷地の大部分を東北6藩（仙台・会津・秋田・庄内・南部・津軽）に分割して管理させたのである。

5. 武四郎の蝦夷地調査

弘化元年（1844）、武四郎は母の3回忌、父の7回忌を終えると伊勢神宮に参拝した。旅先から実家に手紙を託せたのも伊勢神宮、伊勢参りがあったからであり、自身も伊勢出身ということで各地で歓迎されることになったからである。2月、青森へ向けて出立

したがいろいろと各地へ寄り道しているところが面白い。越中では立山に登ろうとして断念したり、越後では親鸞聖人の足跡を訪ね、出羽三山や鳥海山にも登っている。津軽の鱒ヶ沢で蝦夷・松前への渡航を頼むが断られた。蚕社の獄で逃亡した高野長英を指名手配して探索していたのであった。そこで、渡航を翌年に持ち越さなくてはならなかった。いったん江戸に戻ったのち武四郎は翌年鱒ヶ沢から江差の斎藤佐八郎の船に乗ることができ、ついに蝦夷地に渡ることができたのである。

江差に上陸した武四郎は箱館の場所請負商人の白鳥新十郎らの力を借りて、和賀屋孫兵衛の手代となって調査に取り掛かった。噴火湾沿いにウス(有珠)、モロラン(室蘭)、ユウフツ(勇払)、クスリ(釧路)、シレトコ(知床)まで足を伸ばした。この記録を『初航蝦夷日誌』として纏めたのであった。これ以降、武四郎は活動の拠点を江戸に移した。海防に関心の高い水戸藩の人々との交流が始まったのもこのころからである。翌年、2回目の蝦夷地調査に赴く際に水戸の儒学者藤田東湖が餞別に和歌を贈っている。この時、松前藩の医師西川春庵が樺太へ行くことになっていたので、これに加えてもらい彼の地を踏むことになる。帰りは宗谷から日本海沿岸を江差へ戻ってきた。この年の冬は江差で過ごしたが、ここで陽明学者頼山陽の息子、頼三樹三郎に出会うことになる。2人はすぐに意気投合したのだった。

嘉永2年(1849)、32歳になった武四郎は3回目の蝦夷地調査に乗り出した。三厩(みんまや：津軽)から松前へと渡り、国後島の漁業を請け負っていた柏屋喜兵衛の船で国後島、択捉島の調査を開始した。3度の蝦夷地調査を35冊の日誌に纏め上げると、すぐに世間の着目するところとなって、武四郎の名は蝦夷通として知られるようになり、各藩から日誌を写させてもらいたいとの依頼が殺到することになった。しかし、この中には松前藩や御用商人たちがアイヌを搾取していることを厳しく批判したため、これまで協力してくれた藩や商人を敵に回すことになり、個人での蝦夷地調査の継続は難しくなっていた。幕末のころ、アイヌたちを苦しめた政策は「場所請負制」と「撫育同化政策」であった。松前藩はアイヌの人たちの自由な交易を制限して、海岸沿いに地域を定め「商場」(場所)を設け、これを知行地として家臣に与えて、藩士はそれを商人に売却して収入を得ていた。これにより、商人たちはアイヌを強制的に酷使して利益をあげていたのである。また、後者は独自の文化を持つアイヌ民族に対して、無理やり彼らに本州と同じような暮らしを強制したのだった。

嘉永6年(1853)、ペリーが来航し、翌年「日米和親条約」が締結されると下田、箱館の2港が開かれて鎖国は解かれた。ロシアとも同様の条約を締結した幕府は、蝦夷や樺太の地理を明らかにするため調査を武四郎に命じてきた。これより武四郎は4、5、6回と幕命による調査を続け、膨大な調査報告書と地図を作製したのである。26枚に分割された地図は北海道、国後、択捉を含むもので、その大きさは縦2.4m、横3.6mにもなり、内陸まで詳細に描かれたものであった。

6. 明治を生きた武四郎

明治維新を迎えると、大久保利通^{おおくぼとしみち}の推薦もあり武四郎は明治政府に登用されることになる。蝦夷地を6度も調査したエキスパートの知見を明治政府は必要としたのである。大久保は木戸孝允^{きとたかよし}宛ての手紙の中で、武四郎のことを高く評価している。明治2年(1869)、五稜郭の戦いが終結すると、政府は開拓使を設置していよいよ蝦夷地開拓を進めたのである。武四郎は8月、開拓判官(長官、次官に次ぐ重要ポスト)に任じられた。その功績により従5位に叙せられたのであった。それに先立ち、道名、および国名、郡名の選定案を政府に提出しており、北海道に決まったのは先述のとおりである。武四郎は場所請負商人の排除を強く主張したため、既得権益の勢力との対立が激化し彼は孤立してゆくのである。開拓判官に就任してわずか半年の間に2回も辞表を提出した。1回目は島義勇^{しまよしゆき}(旧佐賀藩)から慰留されたものの、初代長官の鍋島直正^{なべしなおまさ}(旧佐賀藩主)が東久世通禧^{ひがしくげみちとみ}に交代するとこれと島が対立し、結局半年で彼も政府を辞職したのであった。彼にはアイヌ民族に対する搾取は決して見過ごすことは出来なかったのであろう。こののち、彼は2度と北海道を訪れることは無かったのである。

武四郎は政府を去ってのち、雅号として「馬角齋(ばかくさい)」を得意の篆刻^{てんこく}で彫って使用している。政府への失望を皮肉ったものだったのである。彼は遅めの42歳の時に結婚した妻とうとの間にできた1人娘「一志(いし)」を可愛がっていたが、残念なことに明治6年病を得て夭折してしまった。その後は幼少時に興味があった古物収集に熱中してゆくのであった。それは単に古物の収集に留まらず、同好の人々と珍しい古物を持ち寄って展覧会を開くなどしており、単なる収集家ではなかった。晩年の武四郎は学問の神様の菅原道真を信仰し、賛同者を募って各地の天満宮に銅鏡などを奉納している。不遇な人生を送った道真に何か共感するものがあつたのかもしれない。

明治12年(1879)、武四郎は妻とうを伴って京都、奈良、大阪を巡り、娘一志^{いし}の7回忌供養として高野山に位牌を納めたのである。明治14年(1881)、京都の北野天満宮から大宰府まで各地の天満宮に参詣した。明治18年(1885)から20年にかけて、武四郎は三重県と奈良県に跨る大台ヶ原^{おおだいヶはら}登山に出かけている。武四郎はすでに68歳になっていたが、当時人跡まばらな険しい山へ奈良県上北山村から最高峰の日出ヶ岳^{ひのでがだけ}へと登り尾鷲^{おわせ}へと下山したのである。大台ヶ原の探査は3回に及んだが、地元の協力を得て登山道の設置や小屋の建設などを行ったのであった。

明治20年(1887)、70歳になる武四郎は東京の自宅^{たたみいちじょう}に畳一畳分の小さな書齋を建てた。この時、これまで交流した様々な人からその土地の有名な古材を贈ってもらい、これを組み合わせて建てたものであった。これを「草の舎(くさのや)」と称したが、今も国際基督教大学のキャンパス内に残されている。明治21年(1888)、武四郎は外出先で脳溢血で倒れ、2月10日自宅で71歳の波瀾に満ちた生涯を閉じたのである。

7. まとめ

これまで武四郎の経歴を見てきたわけだが、そろそろ全体を総括していくとしよう。歴史学者の山内昌之氏は『歴史街道』（平成30年10月号）の中で、彼には「3つの顔」があると指摘されている。山内氏は武四郎を「探検家」よりも「トラベラー」という肩書が相応しいと捉えている。もっと言えば「旅行者」よりも「記録者」、しかもきわめて優れた記録者だった。これは彼の著述や作成した地図をみると一目瞭然である。『近世蝦夷人物誌』や『東西蝦夷山川地理取調図』には彼の確かな記録力を読み取ることができる。

2つ目の顔はヒューマニストとしての側面だとする。和人がアイヌの男を労働力として遠方へ行かせ、その間に女性たちに狼藉を働いていたと怒りを込めて記述している。武四郎はアイヌへの非道を厳しく批判したのである。のちに開拓使の中で孤立しても決して信念は曲げなかったのであった。

3つ目は「エコロジスト」としての顔である。これは2番目のヒューマニストにもつながるが、アイヌ民族の生活を守ろうとした人だったと指摘している。武四郎は幼少時より登山が大好きで旅の途中には必ず山に登っている。これは生涯変わらなかった。後に大台ヶ原の探査をしているが、山や自然を愛し、生態系を尊んだと推測されよう。

我々は武四郎を探検家、北海道の名付け親と捉えている人が多いが、山内氏の指摘されるような3つの顔を持ったとてつもなく優れた男だったのである。150年前の彼のメッセージは現代にも通じるもので、色褪せない輝きを放っている。(完)

【参考文献】

「幕末の探検家 松浦武四郎入門」（山本 命著：月兎舎）

「松浦武四郎記念館図録」（松浦武四郎記念館発行）

「歴史街道 平成30年10月号」（大山耕介編集：PHP 研究所）

「がいなもん 松浦武四郎一代」（河治和香著：小学館）

「エゾの歴史」（海保嶺夫著：講談社選書メチエ）

「あなたの知らない北海道の歴史」（山本博文監修：洋泉社）

「アイヌ民族：歴史と現在」（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構発行）

この他、ウィキペディアの資料並びに松浦武四郎記念館の資料を参考にした資料の写真是ウィキペディア並びに松浦武四郎記念館の資料、各種HPからも掲載した



資料 1 : 松浦武四郎



資料 2 : 頼三樹三郎



資料 3 : 藤田東湖



資料 4 : 吉田松陰



資料 5 : 鍋島直正



資料 6 : 東久世通禧



資料 7 : 島 義勇



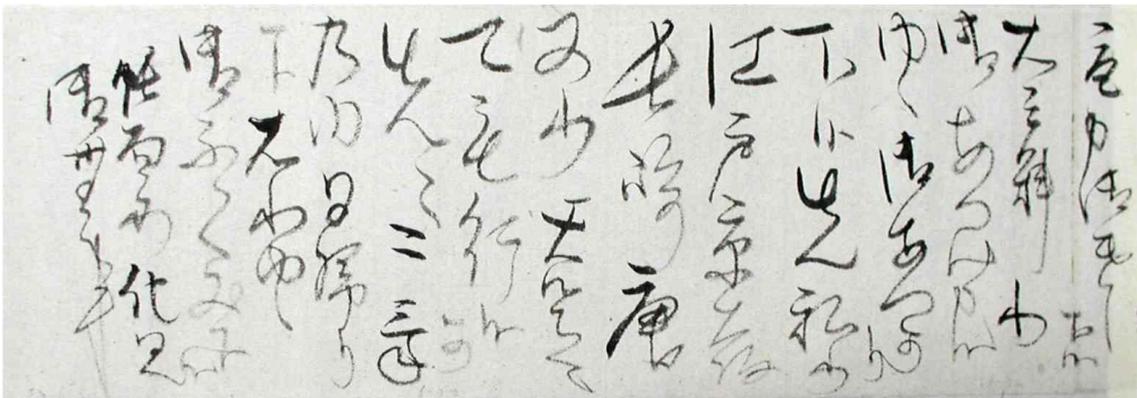
資料 8 : 大久保利通



資料 9 : 東西蝦夷山川地理取調図



資料 10 : 同左



資料 11 : 松浦武四郎書簡 (天保 4 年)



資料 12：松浦武四郎記念館



資料 13：武四郎の生家



資料 14：道南十二館



資料 15：武田信弘

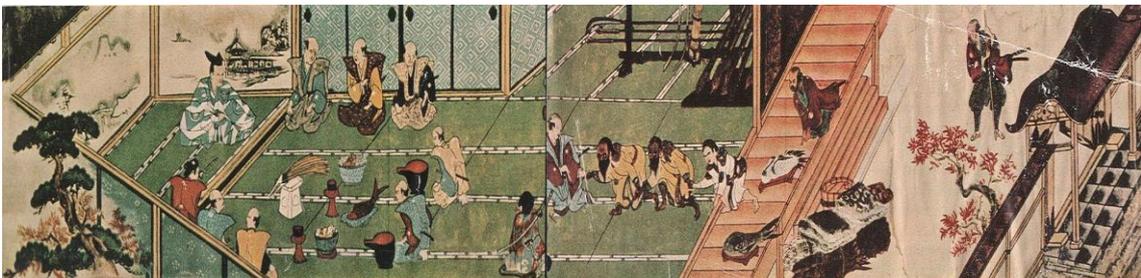
資料 16：蛎崎慶広



資料 17：蝦夷漫画



資料 18：北蝦夷余誌の挿絵



資料 19： ウイマム（アイヌ謁見の図：小玉貞良による）

松浦武四郎の蝦夷地探査ルート (1〜3回は個人で、4〜6回は幕府の御雇い役人として調査)



弘化2年 (1845) 28歳



安政3年 (1856) 39歳



弘化3年 (1846) 29歳



安政4年 (1857) 40歳



嘉永2年 (1849) 32歳



安政5年 (1858) 41歳

資料 29 : 松浦武四郎の6回の蝦夷地調査ルート (「松浦武四郎入門」(山本命著)より)

松浦武四郎の経歴				
西暦	元号	年齢	出来事	参考
1818	文政1	0	松浦桂介(時春)の4男として生まれる	伊能忠敬没
1824	文政7	7	近くの寺で読み書きを習う、「名所図会」を愛読する	
1830	天保1	13	津藩の平松楽齋に学ぶ	文政のおかげ参り
1833	天保4	16	家出し、江戸で見つかり連れ戻される	天保の大飢饉(~39)
1834	天保5	17	諸国を巡る旅に出る(~43)	水野忠邦が老中となる
1839	天保10	22	平戸の寺で住職を務める(3年間)	蛮社の獄
1843	天保14	26	郷里へ戻り父母の墓参	阿部正弘が老中となる
1845	弘化2	28	第一回蝦夷地調査	イギリス船琉球来航
1846	弘化3	29	第二回蝦夷地調査	
1849	嘉永2	32	第三回蝦夷地調査	
1853	嘉永6	36	吉田松陰と海防問題を語り合う	ペリー、浦賀に来航
1855	安政2	38	幕府から蝦夷地御用御雇の命を受ける	蝦夷地が幕府直轄になる
1856	安政3	39	第四回蝦夷地調査	アメリカ総領事ハリス着任
1857	安政4	40	第五回蝦夷地調査	
1858	安政5	41	第六回蝦夷地調査	安政の大獄
1860	万延1	43		桜田門外の変
1867	慶応3	50		大政奉還
1868	明治1	51	上京の召書、任徴士箱館府判官事	鳥羽伏見の戦い、戊辰戦争
1869	明治2	52	任開拓判官、同名・国名・郡名選定に尽力	版籍奉還、蝦夷地を北海道に改称
1870	明治3	53	開拓判官を辞職、従五位返上する	
1875	明治8	58	北野天満宮へ大神鏡を奉納	千島樺太交換条約
1876	明治9	59	上野天満宮へ大神鏡を奉納	
1877	明治10	60		西南戦争
1882	明治15	65	大宰府天満宮へ大神鏡を奉納	
1885	明治18	68	第一回大台ヶ原探査	内閣制度創設
1886	明治19	69	第二回大台ヶ原探査	学校令公布、北海道庁設置
1887	明治20	70	第三回大台ヶ原探査、畳一畳の書齋を作る	
1888	明治21	71	2月10日死去	市制・町村制公布